
「復興と芸術」 2

—Don't Follow the Wind :

帰還困難地域で開かれている、「見ることのできない」展覧会

野々村文宏

—要旨

2011年福島第一原子力発電所の事故の結果生まれた、福島県の高線量区域である帰宅困難地域で、「見ることのできない」といういかにもコンセプチュアルな展覧会が開かれている。今回は、この展覧会、Don't Follow the Wind 展について考察するとともに、同展を、美術館批判または展示の場批判の従来からの問題構成の文脈のうえにある最先端・最突端の展覧会として位置づけてみる。

Don't Follow the Wind (以下DFWとも表記)とは、震災直後の福島第一原発事故を受けて、福島県の「帰還困難地域」内の計4か所で、2015年3月11日から開催されている展覧会である。

ここでいう「帰還困難地域」の定義とは、国が定めた、「放射線量が非常に高いレベルにあることから、バリケードなど物理的な防護措置を実施し、避難を求めている区域。」である⁽¹⁾。

帰還困難地域は原則として立ち入り禁止である。そのなかで開催される展覧会なので、原則として、われわれは、指定が外れるまで展覧会を見ることはできない。立ち入り禁止の指定解除が行われて、はじめて展示物を見ることができる。言い方を換えれば、それまでは作品は封鎖中の状態なのである。では、それは展覧会と呼べるのだろうか？ 展覧会の形式を満たすのだろうか？ 2015年9月19日から11月3日まで、東京・神宮前ワタリウム美術館で、Don't Follow the Wind - Non - Visitor Center 展が開かれた。

一般に、よく、国立公園など比較的広範囲な文化施設には、訪問者の便宜を図るためにビジター・センターが置かれる。これをもじって、東京の「安全な」美術館に、非訪問者(なぜなら、訪問したくとも、「今」はまだ立ち入り禁止区域だから)のためのセンターを設置しようという試みである。これは、帰還困難地域の指定解除になるまで、不定期で各地で開かれる展覧会だそうである。このNon - Visitor Center 展によって、われわれは、あくまで間接的に、立ち入り禁止区域の展覧会の内容を知ることができる。

物事の核心に触れずにもどかしいことのたとえに、「隔靴搔痒」という四字熟語がある。靴底を介して足の裏の痒い部分をかくさまでが、まさにこの Non - Visitor Center 展は、直接には触れることのできない、隔靴搔痒を狙った展覧会であると評価できるだろう。

また、DFW の WEB サイトは、白い空白の画面が表示されるだけで、音声でプロジェクトの説明（日本語／英語）だけが流れていく。これもまた、展覧会が、「見えない」ことの代替表現になっている⁽²⁾。

DFW の出品作家は、アイ・ウェイウェイ、グランギニョル未来、小泉明郎、タリン・サイモン、竹内公太、竹川宣彰、Chim↑Pom、ニコラス・ハーシュ&ホルヘ・オテロ＝パイロス、トレヴァー・パグレン、エヴァ&フランコ・マッテス、宮永愛子、アーメット・ユグの 12 組である。

この展覧会のキュレーターは、ジェイソン・ウェイト、窪田研二、エヴァ&フランコ・マッテス。主に、筑波大学准教授である窪田研二が中心に動いた。窪田研二は前任の水戸芸術館現代芸術センター学芸員時代にグラフィティ・アートを扱った「X-color グラフィティ in Japan」展を 2005 年に開くなど、もともと美術館以外の場で展開する表現活動に関心の所在の一部があると思われる。

発案は、Chim↑Pom で、震災の 1 年後の 2012 年に、このプロジェクトを思いついたという。

当初、この展覧会は、展覧会というよりも Chim↑Pom に大手映画会社から頼まれたドキュメンタリー映画の企画であったらしい。ところが、企画制作の端緒にあたって、その映画会社が離れたため、いわば振り出しに戻り、資金ゼロの状態から始めるしかなかった。結果、制作費は、Chim↑Pom の作品を DFW のために作り売ることでもかかなかった。また、ふつう公共空間での展示や地域の芸術祭での展示などでは、作品の設置とそれに先立ち作品を設置する場所の選定や下見などが必要だが、そのための立入の許可を取らなければならなかった。

「公益立入」とは、平成 23 年（2011 年）4 月 23 日に日本政府の原子力災害対策本部（本部長：菅直人内閣総理大臣）により公示された「警戒区域への一次立入許可基準」に示された、「立入が認められなければ著しく公益を損なうことが見込まれる者（公益目的）」と認められた者だけが認められる立入のことである。この、「公益一時立入車両通行証」はワタリウム美術館でのサテライト展に展示された⁽³⁾。

立入の許可は市長村長によって決定され、立ち入る際には個人線量計を着用するとともに、タイベック・スーツまたは雨合羽、放射性物質の吸入防止のためのマスクその他に加え、安定ヨウ素剤を携行する。スクリーニングも実施され、基準値を上回った場合には除染を行わなければならない。

なにより、他の場所から来た、住民ではないアートの関係者が公益立入の許可を取るとは難航した。なかには公益立入の許可を取らずに、地域住民に協力してもらい一時帰宅許可の枠を使ったケースもあるという⁽⁴⁾。

「帰還困難地域」の設定基準は、2011年度末（2012年3月）の段階で放射線の年間積算線量が50ミリシーベルトを越え、また5年間を経過しても年間積算量が20ミリシーベルトを下らないと推定された地域とされている。「帰還困難地域」は、大きなカテゴリーの「避難指示区域」を3つにわけたうえの、もっとも線量の高く行動が制限される区域である。

この「帰還困難地域」は、2016年現在、福島第一原子力発電所のある双葉町と大熊町、さらに富岡町、浪江町、葛尾村、飯舘村、南相馬市の合計7町村にまたがっている⁽⁵⁾。

帰還困難地域が同心円状ではなく北北西に伸びた帯状になっている理由は、原発事故のあった直後の風向きによって放射性雲（放射性煙流）が流れていった結果である。展覧会名のDon't Follow the Windとは、海釣りの好きな地域住民の偶然語った、「風を追うな」、の意味であり、風が吹く方向つまり放射性物質の流れていく方向に避難してはいけないという意味に読み替えることができる。

原発事故当初、政府は原子力発電所から同心円状に避難指示を出した。3月11日夜19時03分に首相官邸での緊急記者会見で、枝野官房長官が「原子力緊急事態宣言」を発令してから、避難指示は時を追うにつれ、同心円状に拡大していった⁽⁶⁾。

日本政府は、福島第一原発事故の直後から、文部科学省管轄の原子力安全技術センターが持つSPEEDI＝緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステムにより、放射源情報と地形・気象情報の組み合わせにより放射性物質の飛散状況を試算予想していたが、交通渋滞や生活用品の買い占めなどより大きな社会混乱を招くとして国民への情報公開を先に延ばし、後に批判されることとなったのを、私もふくめて多くの国民が強く記憶している。風向きが変われば放射性物質の飛散状況も変わる。福島第一原子力発電所は海沿いにある。事故当時、私は、風がより長く西を避けて、東の太平洋の方向に吹いてくれれば、と何度も祈るような気持ちだったことを覚えている。最近、事故から5年が経過した平成28年（2016年）8月31日付けで、日本政府は原子力災害対策本部と復興推進会議の名で、2022年に一部避難区域指示解除に動くことを発表した。避難指示解除準備区域と居住制限区域については、帰還困難地域より早く避難指示解除になっていく予定である⁽⁷⁾。

また、環境省は来年度予算の概算要求で帰宅困難地域の除染予算を計上している。しかし、これから除染が始まるとはいえ、避難指示解除になるのは早くても2022年からで、事故の過酷性を考えると、最初、指定解除は全域ではなくあくまで段階的で、一部地域にとどまると予想される。すると展覧会が公開されるのは、早くても2022年以降であり、しかも作品の設置場所がどこであるかは明らかにされていないので、DFW展に出展された作品のすべてがいつ見るようになるかはまったくわからない。経済産業省によれば、避難指示の基準は、ICRP（国際放射線防護委員会）の示す年間20～100ミリシーベルトのうちのもっとも厳しい年間20ミリシーベルトの数値に合わせたとしている⁽⁸⁾。

ここで、原子力規制委員会は、福島県内の学校の校舎・校庭等の利用判断の基準を、「暫

定的考え方」とことわりながら、年間1~20ミリシーベルト、毎時3.8マイクロシーベルト以下としている。

しかしながら、成長期の子どもの放射線への感受性は成人に比べて高いとされるため、いわゆる低線量被曝への畏怖は、子どもたち本人やその保護者たちに強く残っているものと推定される。その被害の実態についてはわからないが、少なくとも人の心に畏怖は残り、行動に影響を与えるだろう。そして、そもそも、たとえば、2011年の事故発生当時に5歳だった子どもは2022年には16歳になっている。10年以上の避難・疎開は、故郷喪失の体験にかぎりなく近く、はたして避難指示解除を受けて戻ってくる若い世代はどれぐらいいるだろうか。また年長者のなかには物故者も多く出てくることが予想される。避難指示区域の人的なコミュニティを保ち続けることは、かなりの難題にも思われる。

また、避難者の子どもが偏見にもとづく差別やいじめを受ける社会問題も多く報告されている。最近も、これは避難指示区域の外側だが、横浜市に自主避難してきた現在中学1年生の男子生徒が小学校時代に同級生にいじめを受け、賠償金をもらっているだろうと言いがかりをつけられ、150万円ほど払わされていたことが告発された⁽⁹⁾。

避難民が放射能に汚染されていて汚らわしい存在である、といういわれなき差別の構造も根深い。

私は、避難指示が解除されたとき、ここに置かれたDFWの作品と、展覧会の作品を見にくるビジターたちと、地域社会のかたちづくりの三角形の関係がどうなるのかという点に、もっとも興味がある。しかし、避難区域の全域解除がいつになるかわからない以上、DFW展に出展された作品のすべてがいつ見ることができるようになるかもわからないので、私も、私が健康で存命のうちに、同展を現地で見ることができるかどうかかわからない＝避難区域指定が解除されて展示を見る事ができるようになったときには、私は死んでいるかもしれない、という未来の不確定性をはらんでいるのである。

DFW展実行委員会による展示のガイドラインのなかに、

「主催者は、展示作品が環境とともに経年変化する状況も作品に包含されているものとして捉えており、ある時点を切り取った作品イメージはプロジェクトの断片であると考えている。」(同展カタログより)

とある。私はここがこの展覧会の展示の重要な試みであると考えている。

実行委員会メンバーの美術評論家・榎木野衣(多摩美術大学教授)は、ワタリウム美術館での同展カタログへの寄稿のなかで、アメリカのアースワークスの作家として有名なロバート・スミッソンの、サイトとノン・サイトの弁証法を取り上げ、説明する⁽¹⁰⁾。

スミッソンは、ホワイトキューブのような近現代美術館や画廊などの作品が展示される空間は、ノン・サイト(非=場所)であり、われわれがふだん置かれている場所こそがサイト(場所)である、と説明する。これは一見わかりにくいのだが、大きな時間の流れのな

かで万物が生成流転している場所がサイトであり、美術作品が展示される近現代美術館や画廊などの空間のほうがむしろ特殊なケースなのだ、という意味を言外にはらんでいる。ニューヨーク近郊のニュージャージー州パサイクに住み、SF作家のJ.G.バラードの作品を読み親しみ、子どもの頃にイエローストーン国立公園の間欠泉にいたく想像力を刺激されたロバート・スミソンは、野外の雨風に晒され、人工的に／建築的に作られた、水平な床や、白い屹立するリジッドな壁などない、自然の地形のなかに作品が置かれているさまを創案した。作品は場所にくくりつけられ、移動することが無い。環境と作品の境界は曖昧で、ちょうどスミソンの代表作「スパイラル・ジュッティ」(米国ユタ州、1970年)がそうであるように、自然界の経年変化のなかで作品じたいが自然と同化し消えていくこともままある⁽¹¹⁾。

というよりも、われわれが自明と思っている、巡回展の構造じたいが近代の美術館の成立とともに生まれた人工的な制度であって、むしろ歴史的には浅い形態でしかないとを念頭に入れば、この展覧会の試みが見えてくるであろう。しかし、サイトとノン・サイトはお互いに相反するだけのものではなく、むしろ相補的に働きかける。スーザン・ソングが写真論のなかで指摘し、今では、われわれは、ある特定の場所にくくりつけられた作品を大量の写真、映像、文章などのドキュメントとともに読みとき、そのドキュメントもふくめて作品だと考えることを慣習的に理解している⁽¹²⁾。

スミソンのやったことは、いわば、近代において慣習化されたノン・サイトの展示法というテーゼに対して、サイトというアンチテーゼをつきつけて、より高次の展示の概念に昇ることだった。そして、このDFW展が、40年以上の時を経て、スミソンのサイトとノン・サイトの弁証法をいわばアップデートしているのは、作品が、人里離れた場所にある／自然と一体化している、のではなく、原発事故によってふりまかれた放射性物質によって、立入禁止区域になっている、のであって、鑑賞者・参加者は展覧会を見ることができない、つまり、宗教における密儀のような構造になっていることだろう。

まず、帰宅困難区域について、大きくくくれば環境問題・環境汚染というフレームになろうが、放射性物質から発せられる放射線は自然と作品を分け隔てなく平等に貫いていく。無機物の経年劣化の加速化がわかるほどに有為な変化が起こるほどの高線量ではないものの、人為的概念としての境界線をあざ笑うかのように。放射線は笑ってはいないが。そして、われわれの生活する空間の放射線もゼロではなく、いわゆる「自然放射能」と呼ばれる空間放射線が、存在するが。自然放射能は日本の関東地方で年間だいたい1ミリシーベルト前後であり、つまりはその多寡が問題とされているのだが⁽¹³⁾。

次に、人間の立入禁止区域であるので、動物や植物が自由に行き来するようになり繁殖する。放射能について理解できない動物が体内に放射性物質を凝縮していったり放射線によって細胞を傷つけられ命の長さを削られていくのは不憫ではあるが、それは動物たちにはわからない。また、どれぐらいの影響があるのかもなかなか統計が出てこない(そもそも統計を取るのが難しい)。

人間の住宅や商店は、動物や植物に侵入浸潤されて、まさに意図もないまま必然として自然と一体化していく。

同様に、住宅など建築物は人が住まないほうが痛むのが早い。これもまた意図しなくて廃墟と化していく。もっとも、ひとつにそれを防ぐための住宅メンテナンスのために、一時帰宅許可という制度があるとも言えるだろう。この論考で、いま、展覧会に出品された作品の個々について論じるのがためらわれるのは、ワタリウム美術館で開かれたサテライト展が、あくまで、Non - Visitor Center 展である、という性格に由来する。つまり、見る側＝論じる側に決定不能性による判断停止を強いてくるような属性を持つからである。べつの言い方であれば、これは観測問題である。量子力学で有名な「シュレディンガーの猫」のパラドクスを引用しよう。それはこうだ。閉じられた箱のなかに生きている猫が一匹、いる。箱のなかには、猫のほかに微妙の放射性物質と放射線を検出する装置、それに猛毒のガスが密閉された小さな容器が入っている。そして、もしも検出する装置が放射性物質を検出すると大きな箱のなかの猛毒ガスの容器が破壊されるような仕掛けが用意されている。放射性物質が検出されれば、猛毒ガスの容器が破壊され、ガスが大きな箱の中に流出し、猫は死ぬ。放射性物質が検出されなければ、猫は生きたままである。

さて、この閉じられた箱のなかの猫は生きているだろうか死んでいるだろうか。もし1時間以内に放射性物質が崩壊して放射線が出る確率を50%とすると、1時間以内に猫が生きている確率は50%、猫が死んでいる確率は50%である。しかし、われわれが慣習的に、視認して視覚として猫をとらえた場合には、猫が死んでいるか生きているかの二者択一を取ることになる。50%生きていて、50%死んでいるという猫は、われわれは視認できない。しかし、この装置においては、1時間以内の猫が生きている状態と死んでいる状態が、1:1の確率で「重ね合わせ」状態にあると認識すべきである。ところが、われわれが猫の生死を確認しようと箱を開けて見る場合、視認できるのは、重ね合わせ状態にある猫ではなく、生きている猫か死んでいる猫かのどちらかである。われわれの前には、蓋の開けられていない大きな箱のなかで重ね合わせ状態にある猫（作品）が存在しているのだ。⁽¹⁴⁾

—注

- (1) <http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/list271-840.html>
- (2) <http://www.dontfollowthewind.info/>
また、この URL を携帯端末に登録すると宇川直宏作の同展ロゴが携帯画面に表示される仕掛けも施されている。
- (3) <http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/kyokakijyun.pdf>
- (4) ワタリウム美術館の同展覧会カタログ 236 頁の対談、および巻末の年表。
巻末の年表には、この展覧会は、Chim↑Pomが2012年12月26日にニューヨークで思いつく、とある。
- (5) 避難指示区域の概念図（平成28年7月12日時点）、経済産業省
<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/list271-840.html>
- (6) 福島県 避難区域の変遷について 解説
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html>

- (7) http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/kinkyu/pdf/2016/0831_01.pdf
- (8) 「年間 20 ミリシーベルトの基準について 平成 25 年 3 月 経済産業省」
http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/130314_01a.pdf
- (9) 2016 年 11 月 21 日付け、朝日新聞ほか
- (10) Flam, Jack ed. "Robert Smithson: The Collected Writings" University of California Press, Ltd., London, England, 1996
- (11) https://www.robertsmithson.com/earthworks/spiral_jetty.htm
Rozel Point, Great Salt Lake, Utah, April 1970
Collection*Dia Art Foundation, New York
- (12) ソンタグ、スーザン 『写真論』 近藤耕人訳、晶文社、1979 年
Sontag, Susan "On Photography" Farrar, Straus and Giroux, New York, U.S.A, 1977
- (13) 日本地質学会による「日本の自然放射線量」
<http://www.geosociety.jp/hazard/content0058.html>
- (14) 並木美喜雄 『量子力学入門』 岩波新書、1992